

学位取得に向けての親の関与：日米間の比較

1. 皆さん、こんにちは。私はジアヴァンナ・ハンプトンです。私のキャプションのタイトルは学位取得に向けての親の関与：日米間の比較です。
2. これはこの研究発表の概要です。
3. なぜ私がこの研究テーマにしたかですが、それは東洋大学に留学した時、私は親が子供の学位の期待のためにどのようなことをしてサポートするかに感心を持ったからです。また日米で親が子どもたちの成功にどのように影響を与えているのかをもっと知りたいと思いこのテーマを選びました。
4. これが私の研究質問です。一、日本とアメリカの両親は子供の学位取得に何を期待し、またどのように子供の人生に関与しているのか。二、どのような文化的な要因が、学生の専攻を選択することに影響しているのか。三、子供達に学位を取得させるために、アメリカと日本の親はどのようなサポートをするのか、です。
5. 研究の背景についてはこのような ^{じゅんじょ}順序 で話します。
6. このスライドからわかるように、日本もアメリカも大学に入学後2年間は ^{ひっしゅうかもく}必修科目 を取りますが、日本はアメリカとは違い、クラブや他の ^{かつどうなど}活動等 に力をいれます。

7. この情報からわかるように、アメリカの大学の方がはるかに大学の^{かず}数が多いのにかかわらず、日本の方が高校の卒業^{りつ}率、大学への入学率、それから大学卒業^{りつ}率はどれもアメリカより上回っています。また日本での^{ちゅうたいりつ}中退率もアメリカよりはるかに低いです。
8. また、日本とアメリカでは大学入試のシステムがとても違います。日本はセンター試験が^{おこな}行われ一度きりのチャンスしかありませんが、アメリカは色々なテストがあります。ですから日本の学生はそのチャンスにかけて^{よびこう}予備校や塾に^{かよ}通^{ひと}う人が、おおいですが、アメリカ人は一人で勉強して入試に^{そな}備えます。
9. どのようにアメリカの大学生と日本の大学は専攻を選ぶでしょうか。日本は^{あらかじ}予め専門分野を決めて大学に入り、その専攻を変更することは難しいです。しかし、アメリカでは^{かずおお}数多い専門分野がある上、専攻を変更するのはあまり難しくありません。日本は大学入試は将来を決めるものとしてとても大事です。
10. 日本では高校での勉強の目的は大学^{じゅけん}受験に^{ごうかく}合格するためですが、アメリカは社会や仕事に必要な^{きほんちしき}基本知識や能力を^{やしな}養うことです。

11. 日本では親は子供が大学に入ってしまうとあまり干渉^{かんしょう}はしませんが、アメリカの親はご褒美^{ほうび}をあげたり、子供がよりよく学ぶために色々なサポートをします。大学でも学生のモチベーション^{モチベーション}をあげることはとても重要^{じゅうよう}に考えています。
12. アメリカの親は大学での教育に非常に期待をしているため、子供の勉強^{べんがく}や成功のために手助け^{てだす}します。日本の親は大学を卒業しなければ落胆^{らくたん}しますが、あまり大学での教育には期待していません。
13. 親は子供に自信を与え、肯定的な姿勢^{しせい}で大学生活^{せいかつ}を送れるように、日本は経済面^{けいざいめん}では支援しますが、それ以外^{いがい}はあまり干渉^{かんしょう}もしませんし、大学生活も高校の時よりあまりプレッシャーがありません。
14. 大学生のストレスに関する両親^{たいおう}の対応^{たいおう}についてはアメリカの親はストレスを減らすための最善の行動をするし、子供の精神^{せいしん}的サポートをします。またストレスの兆候^{ちようこう}があれば、その原因を理解するように努^{つと}めます。日本は親も子供もストレスには慣^なれていてあまりこの点では問題はありません。子供は頑張^{はげ}れ”と励まされることにより頑張ります。

15. ではここで私が^{おこな}行った研究の方法について話します。この研究には日本人 30 人、アメリカ人 30 人、^{ごうけい}合計 60 人の大学生に参加してもらい、オンラインアンケート調査を^{おこな}行いました。
16. この調査に参加してくれた人についてですが、大学を家族の中で初めて入ったという人はアメリカの方が日本より多かったです。
17. あなたの家族では、誰が大学の学位を持っていますか。という問には日本の親の方が大学の学位をより多く持っていました。
18. このスライドから研究質問 1 の結果について発表します。
19. ^{いか}如何に親にとって学位取得が大切かに対する^{とい}問にはアメリカ人の両親も日本人の両親も学位が必要と考えていますが、日本の両親の方が非常に少しそう思っているようです。
20. 学位がどのくらい将来就く仕事との関係があるかですが 74%のアメリカの大学生は学位が将来就く仕事の^し選択肢を^ふ増やすと考えているのに対し、日本の大学生は 50%がそう思うと答えました。
21. 卒業の^{しんろ}進路に関しては日本の学生はアメリカの生徒より、親と同じような進路を考えているようです。

22. 卒業後の計画としては、日米共親にちべいともおやは子供がつく仕事には干渉かんしょうしないので、子供は自分で決めるようです。
23. 親の期待に関しては日本人の親はアメリカの親より子供に期待をしていることがわかります。
24. また大学を卒業しないことは、日本人の両親にはあまりよく受け入れられないようです。
25. また、日本の学生の方がもっと親は自分がベストをつくすことを願ねがっていると思っていますようです。
26. 大学を卒業する価値かちについては20%のアメリカの学生は大学に行く必要はなかったと答えましたが、日本の学生は皆みな大学に行く必要があったと答えました。
27. ここで研究質問1のまとめをします。学位取得は日本の親の方が高い期待を子供に持っていることがわかりました。また卒業後の計画としては日米共親にちべいともおやは子供がつく仕事には干渉かんしょうせず、子供は自分で決めるようです。
- さらに日本の学生の方がアメリカの学生より親は自分がベストをつくすことを願ねがっていると思っていますことがわかりました。
28. 次は研究質問二の結果です。

29. 学生が今の専攻を選ぶ際、親がどのぐらい専攻の選択に関与しているかですが、アメリカの両親は子供が専攻を選ぶことにあまり関わらないで、日本の両親はほとんど関わらないということがわかりました。
30. アメリカの学生は専攻を選択する際に決め手となった特徴は先ず趣味、そして住んでいる地域、給料のいい就職の順で専攻の選択を決める上に影響していることがわかりました。
31. 日本の場合は趣味が専攻の選択に大きく関係しており住んでいる地域や給料のいい就職はアメリカに比べて低いです。
32. ではここで研究質問2の結果のまとめをします。専攻の選択には日米の親はあまり関与していないことがわかりました。また、専攻の選択はアメリカも日本の学生も趣味と深く関係がありますが、アメリカはその地域、給料の高い仕事等を考えて専攻を選ぶようです。しかし、日本人の大学生はより良い仕事に就くために専攻を選んでいないことがわかりました。
33. 次に研究質問三の結果について話します。

34. 大学生は大学での悩みをどのようにしているのでしょうか。日本の学生の方が^{けいざいめん}経済面についての悩みを親に相談するようです。これはアメリカの学生の方が^{けいざいめん}経済面では親にあまりたよらないようにしていることがわかります。
35. 日本とアメリカの学生はどのような支援を親から受けているのでしょうか。この図からは日本の親の方がアメリカより二倍以上財政支援と住宅支援をしていることがわかります。
36. 研究質問3のまとめとして日本の学生の方が^{けいざいめん}経済面についての悩みを親に相談するということがわかりましたが、それは、日本の親の方がアメリカより財政的な支援をしていることが理由だと考えられます。
37. 最後に結論です。日本の親もアメリカの親も子供の学位取得を^{ねが}願っていますが、そのサポートの^{しかた}仕方が違うようです。教育システムの違い、社会の^{こうぞう}構造、社会の期待が親や学生の考え方に^{ふか}深く影響しているからでしょう。日本の大学では学生は卒業できることを^{ぜんてい}前提にしているため、あまり^{ふあん}不安がないようですが、アメリカではその^{ぎゃく}逆で卒業に^{ひっし}必死です。日本の大学生は^{せいしんめん}精神面でもとても強いと思います。それは、日本で大学に行くまでの経験が関係しているのではないかと思います。だからアメリカでは親のモラルサポートが大

学に入っても必要なのかもしれませんが。専攻について、専門分野を簡単に変更できるアメリカも理由でいいと思いますが、変更せず卒業が予定通りにできる日本のシステムも、目標が決められて良いといえるかもしれません。

38. 将来大学院生を対象に同じような研究をしてみたいです。また大学を卒業した社会人も対象に調査をしてみたいです。日本とアメリカでは大学を中退する理由がどうかについても研究したいです。

39. 最後に考察です。日本の両親は子供に良い経歴を残してもらうことを期待し、アメリカの両親は子供に財政的に独立して欲しいです。日本の両親はアメリカの両親より子供に期待しますが、アメリカの両親は日本の両親よりサポートと支援をしています。この研究は30人の日本の大学生と30人のアメリカの大学生に限られていて、全国レベルではなく、知人が調査対象であるため一般化はできません。

40. これが参考文献です。

41. 謝辞です。(don't say)

42. 私は両親に私の教育をサポートしてくれたことに対して感謝をしたいと思います。そして、私の調査に協力してくださった方々、本当にありがとう

とうございました。また、関根繁子先生と齋藤-アボット佳子先生、今まで日本語の授^{じゅぎょう}業^とを通してさまざまなことを教えて下さり、そしてサポートして下さりありがとうございました。もちろん、ガス先生、おかげさまでポートフォリオがおわりました。皆さん、ありがとうございました。

43. 何かご質問がありますか。